

小学校第4学年 社会科学学習指導案及び授業記録

—当事者意識を育むデジタルアーカイブ活用型防災学習—

1. 単元名 自然災害と向き合う人々

2. 単元のねらい

【知・技】

- ・過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などについて、デジタルアーカイブ史資料や年表などの資料で調べたりして必要な情報を集め、読み取り、被災の事実や災害から人々を守る活動について理解する。
- ・地域の関係機関や人々は自然災害に対し、様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し、さまざまな備えをしていることを理解する。

【思・判・表】

- ・過去に発生した地域の自然災害、関係機関の協力などに着目して、問いを見いだし、災害から人々を守る活動について考え表現している。
- ・自然災害が発生した際の被害状況と災害から人々を守る活動を関連付けてその働きを考えたり、学習したことを基に地域で起こり得る災害を想定し、日頃から必要な備えをするなど、自分たちにできることを考えたり選択・判断したりして表現する。

【態度】

- ・学習したことを基に地域で起こり得る災害を想定し、地域の自治組織の活動に関心をもったり、日頃から必要な備えをするなど自分たちにできることを考えたりしようとする。

3. 単元について

本単元では、過去の自然災害の記録から導き出された減災への取り組みを扱う。過去の自然災害は主に「関東大震災」を扱うこととした。大正12年（1923年）9月1日11時58分に、相模湾北西部を震源とするマグニチュード7.9と推定される関東大地震が発生した。この地震により、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県で震度6を観測したほか、北海道道南から中国・四国地方にかけての広い範囲で震度5から震度1を観測し、10万棟を超える家屋を倒潰させた。また、発生が昼食の時間と重なったことから、多くの火災が発生し、大規模な延焼火災に拡大した。この地震によって全半潰・消失・流出・埋没の被害を受けた住家は総計37万棟にのぼり、死者・行方不明者は約10万5000人に及ぶなど、甚大な被害をもたらした。（引用元：内閣府防災情報のページ <https://www.bousai.go.jp/kantou100/>）

	関東大震災	阪神・淡路大震災	東日本大震災
発生日月	1923年（大正12年）9月1日 土曜日 午前11時58分	1995年（平成7年）1月17日 火曜日 午前5時46分	2011年（平成23年）3月11日 金曜日 午後2時46分
地震規模	マグニチュード M7.9	マグニチュード M7.3	モーメントマグニチュード Mw9.0
直接死・行方不明	約10万5千人 (うち焼死 約9割)	約5,500人 (うち窒息・圧死 約7割)	約1万8千人 (うち窒息 約9割)
災害関連死	-	約900人	約3,800人
全壊・全壊住家	約29万棟	約11万棟	約12万棟
経済被害	約55億円	約9兆6千億円	約16兆9千億円
当時のGDP	約149億円	約522兆円	約497兆円
GDP比	約37%	約2%	約3%
当時の国家予算	約14億円	約73兆円	約92兆円

参考：内閣府防災情報のページ <https://www.bousai.go.jp/kantou100/>

今年には震災から100年を迎える。企画展やドキュメンタリー映画等を通して、貴重な記録と人々の記憶の解凍が行われている。デジタルアーカイブにおいても、関東大震災に関連する史資料が数多く登録されている他、史資料に場所や年代のメタデータが詳細に付与され、学習者に寄り添ったコンテンツアーカイブも多く展開されている。例えば、幅広い分野のデジタルアーカイブと連携し、多様なコンテンツをまとめて検索・閲覧・活用することができるプラットフォーム「ジャパンサーチ (<https://jpsearch.go.jp/>)」では、関東大震災と検索すると神奈川

県や東京都の被災状況を記録した写真が多数閲覧することができる。また、国立映画アーカイブが運営する「関東大震災デジタルアーカイブ (<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>)」では、映像資料を該当の場所ごとにトリミングされた状態でアーカイブし、しかも被災前後の様子を比較することもできるようになっている。

これらの史資料は、大きな震災を経験したことのない子ども達が、自分にとって身近な地域で起きた震災の様子を知ることによって、減災への取り組みに対して切実な問いを抱かせるのに十分な情報が含まれていると考える。記録が纏うメッセージを読み取ることを通して、震災の計り知れない被害に関する理解を深めるとともに、身近な地域を減災視点で見つめ直す活動を位置付けることを通して、自らも記録と記憶の継承者になっていくことを期待したい。

4. 単元の指導計画 全8時間

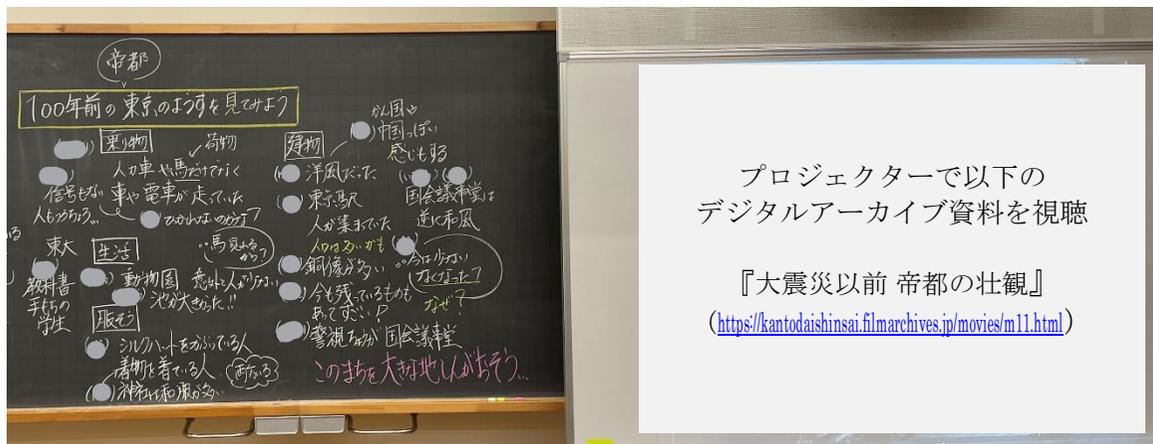
時数	・主な学習活動 *指導上の留意点	・資料 (☆は DA 史資料)
1	・大正時代の東京を記録した映像から、当時の街並みや人々の様子をつかむ	☆大震災以前 帝都の壮観 https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/movies/m11.html
2 3	・関東大震災が起きた事実を知り、被災の様子に関心を抱き調べる。 *神奈川県と東京都の写真进行分类・比較することで、東京都では大きな火災が発生し被害が拡大したことをつかむことができるようにする。	☆関東大震災 鎌倉小学校 https://jpsearch.go.jp/item/kamakura-R100000122_1000000514_00 ☆関東大震災画帖 https://jpsearch.go.jp/item/dignl-12394685?info ・関東大震災の被害に関する統計
4 5 6	・身近な地域のフィールドワークを通して、防災の取り組みと課題について考える *地震が発生した時に倒壊したり火災が発生したりしやすい場所や、少しでも被害を減らすために対応していることがわかる場所などを視点に、フィールドワークを行う。 *消防署や地域の自治団体の取り組みを取り上げ、その価値と今後の課題を考える。	・過去に関東地方で発生した大きな地震 (年表) ・身近な地域の防災に関わる写真 ・消防署や消防団、町内会の取り組み ☆帝都大正震火記録 https://jpsearch.go.jp/item/dignl-1916392 *帝都大正震火記録のうち、『消防活動と防火作戦』の頁を中心に示し、かつ意識を伝えることができるようにする。
7 8	・過去の災害を教訓に見出された防災の取り組みや今後の課題について調べ考えたことをまとめる *関東大震災の記録から見出した震災の実態から、身近な地域の防災について問いをい出し探究してきた歩みを表現することができるようにする。	

5. 実践記録

※実践継続中のため、単元計画のうち地域のフィールドワークまでの実践記録を示す

(1) 大正時代の東京都（帝都）の様子の理解

まだ歴史学習を経験していない子ども達であることから、本単元は、関東大震災の発生した大正時代の様子についてつかむ学習から始めた。国立映画アーカイブが運営する「関東大震災デジタルアーカイブ (<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>)」に収録されている『大震災以前 帝都の壮観 (<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/movies/m11.html>)』を視聴。大正時代の東京都（帝都）には洋風建築が多く存在していることや、人々の服装も和洋入り混じっていることなどから、現代の景観に通じる様子であったことを捉えた。



映像資料には、東京都（帝都）の様々な地域の景観が収録されている。関東大震災の被害の実態をつかむことを意図して本資料を扱うのに、以下の2点を意識した。

- ・震災後の記録が残っている地域
- ・子どもたちにとって身近な地域

丸の内周辺に着目すると、震災前の映像には強固な洋風建築が写る。東京駅の景観は現在のものとほぼ同じで子ども達の関心が高まる。震災後の映像には、丸の内の隣接地域から煙が上がり、道行く人がそちらの方面を確認するような姿も捉えられる。また、帝国劇場周辺に着目すると、丸の内周辺と同じような洋風建築が立ち並ぶ景観が写るが、震災後の映像には猛火に包まれる様子が記録されている。人々が猛火のすぐ近くを非難する様子も写る。学習者が、震災前後の東京都（帝都）の比較から関東大震災の被害を読み取ることができるよう配慮した。

(2) 関東大震災の被害を読み取る

関東大震災発生後の写真を見た子どもたちは、「煙が多くでていることを考えると、色々な場所で火事が起きていたんじゃないか」「洋風の建物が多から頑丈で燃えにくいイメージがあったけど、そうではなかったのか」「丸の内に来ている人は、自分の家の方が気になって仕方がなかったんじゃないか」等、既存の認識を揺さぶられたことから問いを抱いたり、人の思いに寄り添おうとするような気付きを得たりした。そうした一人ひとりの問いや気づきから、『関東大震災についてもっと調べよう』という学習問題が生まれた。



(帝都大震災画報其五) 新吉原仲之町通焼火大旋風之美況 https://ipsearch.go.jp/item/adeac-R100000094_1000158032_00

11/28 震度: ⑦ 神奈川 ⑥ 強〜⑤ 東京都 時間: 11時58分46秒

関東大震災 かつてと詞心

- 動物園 何だか不思議 (奇想)
- 味登有刺園
- 救出している
- NHK 首都圏
- 浅草 浅草公園の残っている
- 津波 津波 津波
- 西神田 浅草 有馬 深川
- 復興は...
- 6年之久
- 少...
- 人の救助
- 友達 かつてから
- わか、天と、老と心と

11/28 関東大震災 かつてと詞心

- 浅草 浅草公園の残っている
- 火が燃え上り、燃え上がる
- 場所の両国
- 火災の風が
- 火場の外 → 大場
- 家が倒れて
- 正解はない
- 火災の再行
- 商店と住人が集まる
- 自転車が倒れる人が
- 下階に入っている人が
- 屋根が落ちて
- 電線が切れている
- 地人があふれる
- 強い建物に
- 変化する?
- 木が倒れる

子どもたちは「ジャパンサーチ (<https://jpsearch.go.jp/>) 」や「関東大震災デジタルアーカイブ (<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>) 」を活用し、関東大震災の被害に関連する記録を調べた。前頁の板書記録で示したように、子ども達が調べたテーマは、建物の倒壊や火災の被害といった比較的読み取りやすい事象に留まらず、「動物園ではどのような対応をとったのだろう」「これだけ大きな被害をもたらした火災とはどんなものだったのだろう」と、さらに問いを生み出し調べていく姿が見られた。



関東大震災 鎌倉小学校 https://jpsearch.go.jp/item/kamakura-R100000122_I000000514_00

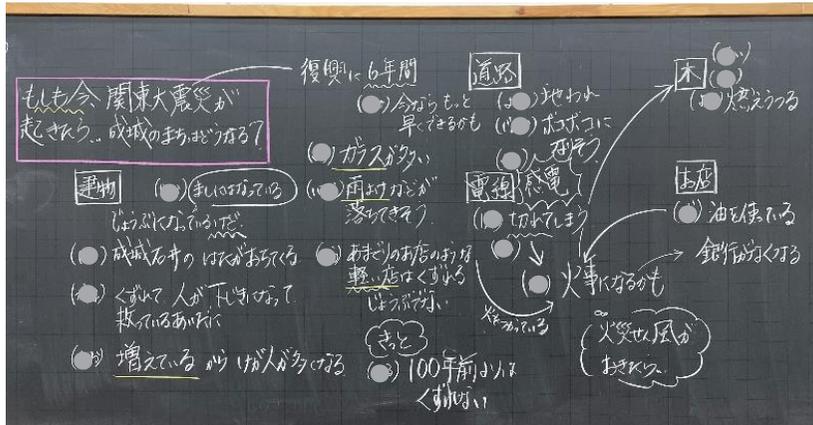


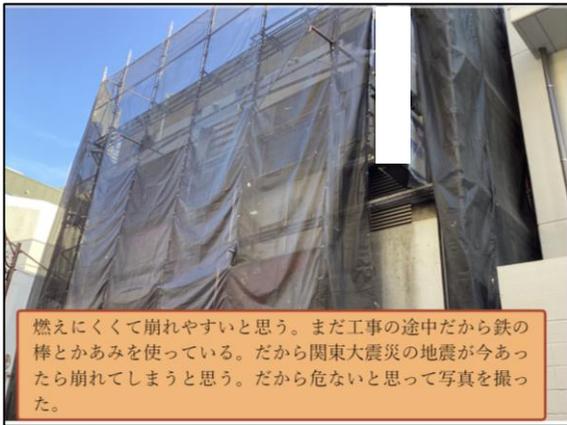
関東大震災画帖 (5/15頁右を抜粋) <https://jpsearch.go.jp/item/digital-12394685?info>

(3) 身近な地域の防災を見つめ直す

関東大震災から100年が経過し、その間関東地方では大きな震災が発生していない。しかし、過去に関東地方で発生した大きな地震を年表で調べてみると、定期的に発生していることが見えてくる。関東大震災を調べていく中で、「もし関東大震災が起きた時に世田谷区(本校がある地域)に住んでいたら、大変なことになっていたはず」と、震災は決して他人事ではなく、自分たちもいつでも被災の当事者となりうることに気が始めた子どもが多かった。そこで、『もしも今、関東大震災が起きたら…成城のまちはどうなる?』という問いを立て、防災を視点としたフィールドワーク活動を実施した。

慣れ親しんだまちではあるが、防災を視点に歩いてみるとこれまでとは違った事象が捉えられた。例えば、駅前の店舗に注目してみると、飲食店が多く並んでおり、調理中に震災が発生した際、火災の発生源となる可能性はないかと考えた。また、工事中の箇所が見られた際に足場の安全性に注目したり、細い路地や古い家屋が見られた際には、倒壊により避難経路が確保しづらくなる可能性を見出したりした。一方、鉄骨で補強された建物や緊急車両が十分に通ることができるような道幅のある通りの存在に気付く様子もあり、過去の震災からの経験を生かしたまちづくりも進められているのではないかと気づきを得ている子どももいた。



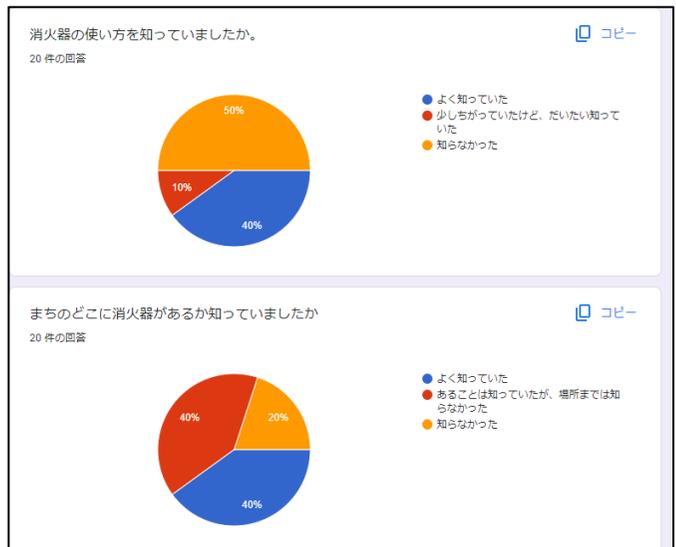


もしもの事が起きた時に役に立つ設備

消火器や避難場所の地図などが有る。

特に子ども達が着目したことは、まちの至る所に消火器が設置されていることや、避難場所を示した地図が配置されていることであった。デジタルアーカイブ史資料から関東大震災の記録を読み取る中で、東京都では多くの火災が発生し甚大な被害が出ていたことを認識していたので、震災の経験をいかして防火設備が整えられていったことを捉えることができた。消火器収納されているボックスに“地震だ火を消せ！”という表記があったことから、地震によって引き起こされる火災への備えが成されていったことが伺えた。

なお、消火器の設置がされていることに関して、そもそも使用する側が使い方や設置されている場所を知っているのかが大切だと考えた子ども達は、アンケートを実施して実態をたしかめる活動を展開した。このような調査活動を経て、今後『関東大震災の被害やまちの防災について調べてわかったことをもとに、自分たちにできることを考えよう』といった問いを立て、子ども達が当事者意識をもちながら防災のあり方を探究していく学習を続けていきたい。



6. 考察

(1) 防災教育におけるデジタルアーカイブ史資料活用の方法

本単元で扱った関東大震災に関するデジタルアーカイブ史資料には、以下の点で教材として活用しやすい史資料であった。

- ・史資料のタイトルやメタデータに「場所」が示されている
⇒「場所」で分類することで共通点や相違点を考える活動を展開することができる。
- ・史資料が記録された「時間/時代」が示されている
⇒西暦年が、史実を調べる明確な手掛かりとなる。
⇒時系列で並べることで、前後の変化を読み取る活動を展開することができる。
- ・写真、映像記録が多くアーカイブされている
⇒文字資料や図表資料に比べ、事実認識の獲得がしやすく、どの子も意欲的に資料読解を図ることができる。
⇒学習者の生活経験との重なりや差異を見出しやすく、問いや気づきにつながりやすい。

「場所」「時間/時代」が示されている点は、現行の小学校学習指導要領解説社会科編で示される「社会的な見方や考え方」

(右図)と照らしてみた時に、「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」の視点を働かせて追究していくために必要不可欠なメタデータであると言える。本単元においては、これらのメタデータを生かして教材提示の方法を工夫したことで、関東大震災による被災の状況を理解することにつながった。

小学校社会科「社会的な見方や考え方」

【追究の視点】

社会的事象を

- ・位置や空間的な広がり
- ・時期や時間の経過
- ・事象や人々の相互関係

に着目して捉える

【追究の方法】

事象を比較・分類したり統合したりする
地域の人々や国民の生活と関連づける

(参照:幼稚園,小学校,中学校,高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申))

(2) デジタルからリアルへ、当事者意識を育む学習展開

学習者が暮らす地域の災害の特性を理解することや、地域の安全を支えること等、防災に関して当事者意識をもつことができるように学習を展開していく事は、防災教育において大切にしたい視点である。本単元では、デジタルアーカイブ史資料を提示する際、子どもたちにとって身近な地域であることを条件の一つとしてきた。実践記録(3)で示したフィールドワークのように、主体的に地域の防災を見直すような活動へと子ども達の問題意識が至るのに寄与した条件となったのではないかと捉えている。防災教育のみならず、デジタルアーカイブ史資料を通して出会った事象に対して、デジタルの世界に留まらず、対象となる人・モノ・コトに直接関わろうとする対話的で深い学びの展開を大切にしたい。

防災教育の目的

1. それぞれが暮らす地域の、災害・社会の特性や防災科学技術等についての知識を備え、減災のために事前に必要な準備をする能力
 2. 自然災害から身を守り、被災した場合でもその後の生活を乗り切る能力
 3. 進んで他の人々や地域の安全を支えることができる能力
 4. 災害からの復興を成し遂げ、安全・安心な社会を構築する能力
- といった「生きる力」を涵養し、能動的に防災に対応することのできる人材を育成すること

〈防災教育支援の基本的考え方,文部科学省

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kaihatu/006/shiryo/attach/1367194.htm〉